「グローバル・シティズンシップと国際協働学習―
こころと身体をうごかして知恵を得る」

浅川 和也

はじめに

昨年、一昨年につづけて、〇〇と国際協働学習ということがテーマだとうかがいました。グローバル・シティズンシップに関連してのお話をということは、わたくしが ESD（持続可能な開発のための教育）に関心を持っていた、ことからだと思います。ユネスコは、昨年にあらたな指針 Reimagining our futures together: a new social contract for education （2021）(https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000379707)を示しました。その根幹には、A new social contract for education つまり「社会契約とは、共通の利益のための公共の社会的な努力」であるとしています。共通の利益こそが、グローバル社会の基盤であり、グロバル・シチズンシップ（地球市民性）とは、それを共同で、獲得していくためのものなのだともいえるでしょう。

本日の報告会には、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）や平和やジェンダー平等、文化の多様性を国際協働・交流でとりくむ実践報告が、予定されています。わたくしの役割は、JEARN まさに iEARN と連携する活動が、国際協働のプロジェクトをとおして、よりよい世界を実現する、そのための見通しとちからをはぐくむものだと裏づけることにあると思っております。

JEARN とのかかわり

いつ JEARN や高木洋子さんと出会ったのかは思いだせないのですが、パソコン通信ができるようになり、1996 年だったか、100 校プロジェクトが動きだしたころだったかもしれません。交流するにしても、学校紹介や食べ物のことなどをやりとりするのが、せいぜいだったようにおぼえています。

高校の教員を 10 年して、名古屋にある短大で教えることになりました。名古屋では、東海スクールネットという団体が活溌でした。滝高校の栗本さん（たぶん数学をご担当されていたようにおぼえています）による記録はまだウェブにあります (http://www.tomo.gr.jp/root/9904.html)。

今でこそ、学内 LAN や Wi-Fi が整備されつつありますが、当時は、熱心な教員が DIY でケーブルを敷設したりしていました。ネパールの病院にパソコンをかついでいったという話もうかがいました。日本・ネパール国際交流実効委員会編『ここまでやるか 国際交流』教育家庭新聞 (https://www.kknews.co.jp/book/kokomade2.html)として刊行されています。

2000 年は平和の文化国際年で、そのころ平和の文化に関するプロジェクトを調べたのですが、キッズゲルニカ（金田卓也・大妻女子大学）[http://kids-guernica-jp.blogspot.com/]は、なかなかおおきなとりくみでした。また、類似のものとして、当時、JEARN でとりくまれていたアートマイ(http://artmile.jp/activity/iime/aboutartmile/)を英語教師に紹介したこともありました。

こころと身体をうごかして知恵を得る

こころと身体をうごかして知恵を得るとしたのは、今の教室には、そのような要素が欠けていると思うからです。仏教系の大学に学んだので、僧侶の教員や先輩、学友がおりました。仏教は、仏・法・僧（ブッダ・ダルマ・サンガ）に帰依すると説きます。膨大な経典や注釈書があるのですが、そうした知恵も、呼吸、歩く、座る（瞑想する）ことによって、会得されるとも思われます。また、身（おこない）・口（ことば）・意（こころおもうこと）ことの一致がなければ、果報は得られないというのです。

仏教の基本として、四弘請願があり、ひとつに「衆生無辺誓願度」があります。衆生を限りなく救うということで、利他、すなわち人のために努力するうちに、知識がついたり、技を体得したり、迷いが無くなったりします。利他は、いつしか自利となるそうです。何のために生きるのか、学ぶのか、と問うときのこたえのひとつとなるでしょう。

若い頃、中村雄二郎著『臨床の知とは何か』岩波新書（1992）を読みました。臨床を現場と置き換えると、実践知となるのでしょう。人とかかわるなかで、何が起きているのか主観をあわせること、そうした間主観性は、身体・こころをも含みこむものだといいます。医療現場において、看護師が患者の様子を感得し、声を聞いているのに、医師とのあいだにあつれきがあるといいます。検査データと、患者の訴えにそごがあることから、関係性に悩むのだといいます。教育現場においてもデータのみならず、実践の知が求められるのは同じなのでしょう。

学校教育を問い直す

学校教育に関するイメージはどのようなものでしょうか。近代学校教育は、一定のカリキュラムのもと均質的な素養を身に着けさせるべく機能しました。近代化と教育の普及は不可分でした。東井義雄著『村を育てる学力』(1957)[記念館 https://toui-yoshio.org/]は古い本ですが、村を捨てる学力ではなく村を育てる学力を、という脱植民地への転換をも予見しています。

学んだことは誰のものかという問い、も考えてみたいです。おしなべて「学力」は個人のもので、それを競争するという原理のもとにあるのですが、仲間とともに仲間から学ぶという視点にたち、学んだことは皆のものだとすると、学習の転換がはかれるのではないでしょうか。個別 にテストで得られた点数は幻想なのかもしれません。

戦前、皇民教育に加担した教育界は、戦後、反省のもと米国のジョン・デューイらによる民主主義教育が導入されました。教師による一斉授業で知識を授ける系統主義と、子ども中心による経験主義との間で教育のありかたは揺れることになります。デューイによって代表される問題解決型学習（Project based learning)は、Learning by doing ですすめられます。「ゆうびん」がどのようにしてなされるかを、劇にしてみたりする、実践がありました。1958 年には、このような、ごっこ遊びは這い回る経験主義として、しりぞけられてしまいます。

およそ 10 年ごとに、教育改革が標榜され、学習指導要領が改訂されます。過度の詰め込み教育への批判から、ゆとり教育（1980 年代から 2010 年代はじめまで）への転換が求められました。1989 年には、生活科が置かれます。また、総合的な学習の時間では、国際理解や情報、環境、福祉・健康といった諸課題へのとりくみが例示され、なかなか意欲的なと

りくみもすすめられたと思います。2003 年に国際学力調査(PISA)の結果が問題視され、学力向上をという声がたかまり、ゆとり教育が是正されるといった具合です。「ゆとり世代」として揶揄されたものでした。

総合的な学習の時間は小学校への英語科の導入もあり、縮小されました。2017 年からの学習指導要領への改訂では、アクティブ・ラーニングという指導方法の唱導がとりざたされましたが、結局は「主体的・対話的で深い学び」ということになります。一方、教科内容は大幅増となっています。

国際教育からグローバル教育へ

かつては国際社会に対応すること、そして、現在では、グローバル社会で活躍するグローバル人材の育成を、ということが謳われたりしてきました。

1990 年代、ERIC 国際理解教育センター[http://eric-net.org/]では、海外から講師を招きグローバル教育セミナーを実施した。開発・環境・人権・平和をテーマに、参加型での活動を軸にするものでした。

グローバル教育との出会いは、1990 年代半ばに、河内徳子（大東文化大学）さんが紹介された D.セルビー（David Selby)さんの来日やカナダでのセミナーの手伝を、毎年夏、5 年間していました。現在は、英国に戻られ、Sustainability Frontiers (http://www.sustainabilityfrontiers.org/index.php?page=david-selby)という団体で気候変動教育にとりくんでいます。

セルビーは、グローバルという言葉には、あらゆることを含むものだとして、一般に国際的に活躍することを想定されるようなことのみならず、内面的なことも含みこむものだとしました。外と内の合一だというものかもしれません。近年、よく耳にするマインドフルというか、こころの平和もグローバル教育の範疇だとしていました。

開発・環境・人権・平和とう地球的課題とともに、どのように学ぶのか、メディア（伝え方・教え方）に意味があり、たとえば、民主主義を学ぶのに黙って教師の言うことを聞いているという伝統的なやりかたは好ましくない、とされました。

グローバル教育というと、とりわけ英語を「話せる」かどうかがとりざたされますが、語学力は、後からついてくるもので、まず、相手とともに協働する場をつくることが肝要だと思っています。

シチズンシップ（主権者）教育

社会の変化にたいして、〇〇教育が提唱され、現場に持ち込まれます。グローバル・シチズンシップ教育は、ユネスコ主導のもとすすめられています。

２度にわたる世界大戦の惨禍をくりかえさないということから、ユネスコは平和への歩みには教育が欠かせないとし、国際理解教育を推進してきています。

ユネスコは「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」を 1964 年にだしています。その 30 年後、第 44 回国際教育会議「平和、人権、民主主義のための教育宣言（ユネスコ国際教育会議宣言）がだされました。また、2005 年から持続可能な開発のための教育の 10 年（UN Decade of Education for Sustainable Development：DESD）」がとりくまれ、その後、2016 年から ESD に関する

グローバル・アクション・プログラム（GAP）が推進されています。

ESD のとりくみには、日本が熱心で、韓国はグローバルシティズンシップ教育（Global Citizenship Education）の促進を提唱し、APCEIU（アジア太平洋国際理解教育センター（The Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding）を中心にとりくまれています。グローバル・シチズンシップ教育は、持続可能な開発のための教育の後継として位置づけることができると思います。欧州評議会でも教育政策の中核とされ、とりくみがすすんでいます。

他方、日本では、シチズンシップ教育は、どちらかというと 2016 年になされた選挙権の 18 歳への引き下げとともに、「政治的教養を育む教育」との関連が深いようにとらえられているようです。主権者教育については、総務省と文科省いづれのウェッブにも教材が所収されています。

総務省

主権者教育の取組状況等

主権者教育のための学習教材

https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/gakusyu/index.html

高校生向け副教材「私たちが拓く日本の未来」

https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/senkyo/senkyo_nenrei/01.html

文部科学省

主権者教育の推進

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/1369165.htm

副教材等「私たちが拓く日本の未来」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/10/20/1362350_2_5.pdf

他方、英国での市民性教育は社会参画をめざしており、長沼豊は、シチズンシップ教育を福祉教育・ボランティア学習として、サービス・ラーニングと同様に紹介していました。1995 年の阪神・淡路大震災、はボランティア活動が、1996 年に NPO 法案が成立しました。それから 25 年、世代交代に悩んでいる NPO も多いのですが、学社（学校と社会教育）融合、学校と社会教育の連携もなされました。学校と NPO との連携では、放課後児童教室や学習支援がなされています。制度面で、さまざまな試みがなされています。

総合的な学習（探求）の時間

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm

「総合的な学習の時間」応援団のページ

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/50.htm

教育によってはぐくまれるちからは、学校にとどまるものではなく、経済産業省からは「社会人基礎力」（https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html）。人生 100 年時代の社会人基礎力について(1989)PDF（https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf）についてのまとめがあります

ワークショップ

ワークショップという言葉が、教育界において、よく使われるようになりました。実際

に、してみなければ、技は身につかないということからでしょう。

佐伯胖著『アクティブ・マインド：人は動きのなかで考える』（東京大学出版会）が出版されたのは 30 年も前のことである。アクティブ・ラーニングという術語がもてはやされながら、消えていたったわけですが、人は考えてから動くのではなく、動きのなかで考えるというのは卓見だといえます。語教師であったわたくしは、考えてから話したり、書いたりするという呪縛にとらわれていた。動くなかで考えが生まれ、変化するということは、衝撃的ですらありました。

今では、ワークショップコレクション(http://wsc.or.jp/)をみると、さまざまなワークショップがあるようです。

学校教育場面とは異なる流れでしょうが、企業の人事やビジネスでの、この手の手法の流布はとてもはやいものがあり、デービッド・コルブによる「経験学習」モデルは、ビジネス界では、はやくから注目されていたとのことです。

ファシリテータとしての教師の役割も、日本ファシリテーション協会(FAJ)(https://www.faj.or.jp/)は多くの会員をかかえる大きな組織です。ビジネスでは、コーチング(日本コーチ協会 https://coach.or.jp/about/)も盛んで、ピータ・センゲ著『学習する組織』(http://www.eijipress.co.jp/book/book.php?epcode=2101)も必読書だそうです。このようなビジネスやマネジメントでの潮流はようやっと『学習する学校』(http://www.eijipress.co.jp/book/book.php?epcode=2140) となったといえるでしょう。教育改革のあらたな波がそとからやってきている(https://www.change-agent.jp/learningorganization/)はそとからやってきているのかもしれません。

ビジネスから目を転じて、よりひとろくは、ワークショップは、まちづくりの動きのなかで、用いられています。ミニミュンヘン(http://www.mi-mue.com/)のようなワークショップもあり、木下勇さんらが翻訳した、ロジャーハート『子どもの参画』萌文社(http://www.hobunsya.com/iccp/sankaku.html)にある参画の階段の図はよく知られていて、子ども主体といいながら、あやつりの参加ばかりというのは、学校関係者には耳がいたいところです。地域では、参画を促進するためにさまざまな活動を、日本ボランティアコーディネーター協会 (https://jvca2001.org/)がしていて、参考になります。

他者とのかかわりのなかで

グローバル教育のセミナーの場は、仲間とともにあるコミュニティを体現するものでした。仲間づくりは、みずからを開示するなかで促進されます。

他者とのかかわりを実現するための手法がさまざまあり、アサーション・トレーニング（日本アサーション協会 https://www.japan-assertion.jp/about-asserion ）やマーシャル・ローゼンバーグによる非暴力コミュニケーション（NVC Japan http://nvc-japan.net/nvc/ ）など、いわば人間関係トレーニングの手法と共通するところがあるように思えます。

古くは立教大学の早坂泰次郎らによる T グループ、それを継承した津村さん（南山大学）らによる日本体験学習研究所（ https://jiel.jp/ ）では、対人援助の方法を追究してきたといえるでしょう。

学校教育では、学校カウンセラーによる教育相談や、SST:ソーシャル・スキル・トレー

ニングを援用した試みもなされるようになってきていますが、どちらかというと個別対応となっているように思われます。

他方、学級や授業においては、構成的グループエンカウンターのとりくみ（図書文化 http://www.toshobunka.jp/sge/ ）が、鹿嶋真弓さんによってなされました。NHK によるプロフェッショナルという番組（ https://www.nhk.or.jp/professional/2007/0403/)で紹介されたプロフェッショナルのツールとしてプリントは、まさにセルビーによるセミナーでも定番であった「権利の熱気球」でのものそのものでした。

体験による学びは身体化を伴い、そうした演劇的手法にも可能性があるのではないでしょうか。渡辺淳さんらによる獲得型教育研究会（ https://www.kakutokuken.jp/ ）による活動にも注目してきました。『アクティブ・ラーニングとは何か』岩波新書を著されてすぐになくなられたのは、ざんねんなことでした。

演劇的手法は、ブラジルから米国への亡命も余儀なくされるアウグスト・ボアール著『被抑圧者の演劇』は里見実さんによって翻訳され、知られています。ほか、日本ドラマセラピー研究所(http://www.geocities.jp/jpdramatherapy/)米国よりファシリテーターを招いたワークショップも実施された。「被抑圧者の演劇」は「被抑圧者の教育」で知られたパウロ・フレイレの潮流にあります。

米同様、独裁政権からの民主化をすすめたフィリピンでは、フィリピン教育演劇協会（Philippine Educational Theater Association: PETA）によって、農村地域の人びとがみずから課題を解決していくための「被抑圧者の演劇」ワークショップがよくなされています。日本でもまちづくりの関係者が、よく PETA の活動家を招いて、ワークショップをしていました。

「被抑圧者の教育」は開発途上国における識字教育の展開に影響をあたえました。日本では、大沢敏郎著『生きなおす、ことば―書くことのちから』（太郎次郎社エディタス）のような実践があり、落涙を禁じえません。身体と言葉のつながりは、教育においても重要で、竹内敏晴著『ことばが劈かれるとき』筑摩書房(1975)は、教師として必読書だと思われます。

たがいに学びあうためには、思いを可視化する手法が求められます。身体や声、言葉をとおして、表現するとともに、内面に向かうことで感情が揺さぶられます。グローバル教育では、内面の次元もたいせつだとしますが、スピリチュアルな精神世界、魂をどのようにとらえるかは、不可思議でもあります。トランスパーソナル心理学は、アカデミズムからどのように、受けとめられているか検証をしなければなりませんが、たとえば、道徳教材にもなったとされる「水からの伝言」は問題をはらんでいます。こうした似非科学にたいするまっとうな知見が試されると思われますが、身体や声、言葉とともに内面の次元のはたらきもおおきいものと思われます。

ジョアンナ・メーシーは東洋思想から、つながりをとりもどすディープエコロジーワークを提唱しました。ディープエコロジーワークでは、スピリチャルな成長も説いていました。鳥山敏子らによる賢治の学校では、絶滅動物の声を聞くというワークショップをしていましたが、精神世界をも含むディープエコロジーワークのひとつかもしれません。

プロジェクトやロールプレイ、ゲーム、ビデオ

体験型の学びとして、野外教育からの展開として、プロジェクト・アドベンチャー（https://www.pajapan.com/）、プロジェクト・ワイルド（https://www.projectwild.jp/）、プロジェクト・ウエット（https://www.kasen.or.jp/wet/tabid121.html）をあげておきます。これらは実体験をともなうものですが、ロールプレイやシミュレーションも数多くつくられてきています。以下、異文化コミュニケーションや国際協力、環境教育、平和教育、人権教育、防災教育での事例を紹介しておきます。

異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションでは、Bafa Bafa（バファバファ）といったロールプレイイングをつうじて、異なった文化や価値観をもつ相手にどのように対処するかを会得するということがなされていました。

国際協力

国際協力の現場では、異文化理解が不可欠で、FASID(国際開発機構）ではケースライブラリー（https://www.fasid.or.jp/case_library/2_index_detail.php）がつくられています。さまざまな場面において、正解はなく、いかに多様な見方ができるかが問われるのではないかと思われます。

環境教育

野外活動において学ぶとともに室内において、ゲームをつうじた学習活動が構想されています。

「マイアース」https://www.soela.jp/my-earth/

は、地球を壊す側と守る側でたたかうカードゲームです。原理は、遊戯王とかポケモンカードとかのカードゲームと似たものなので、とりくみやすいものです。また、こうした環境学習ゲーも NPO によってつくられています。

https://www.env.go.jp/chemi/communication/kyouzai/eco_plant.html

エコロジカルシンキングゲーム

https://www.beansbee.com/tool/ecological-thinking-game/

は、生態系の植物や昆虫、動物が増えたり減ったりする様を体感できるようなゲームでした。

環境教育は幅がひろく、環境省はリスクコミュニケーションにもとりくんでいて、エコプラントやつくろうポンポコ理想郷、すごろく コレクターといったゲームも開発されています。

http://www.env.go.jp/chemi/communication/9.html

http://www.env.go.jp/chemi/communication/index.html

エコプラント

https://www.env.go.jp/chemi/communication/kyouzai/eco_plant.html

つくろうポンポコ理想郷

http://www.env.go.jp/chemi/communication/1-5.html

すごろく コレクター

https://www.env.go.jp/chemi/communication/kyouzai/collector.html

平和教育

戦争の悲惨さを学ぶ平和教育から、平和構築（Peace building）の担い手を育むという転換をめざして、アニメーション『みんなが HAPPY になる方法』（https://www.bepro-japan.com/happyhome）は、つくられました。3 つのアニメーションクリップが所収されて、「鬼退治をしたくなかった桃太郎」をもとにロールプレーイングをするような指導案もつくられました。ほか、『インデ島へようこそ』https://www.bepro-japan.com/online-inde)というアニメーションは無償で公開されています。

人権教育

人権教育でも参加型の学習が追求され、欧州評議会の青年センターでつくられた『人権教育のためのコンパス［羅針盤］』明石書店（https://www.akashi.co.jp/book/b65447.html）および、子ども版としての『コンパシート【羅針盤】子どもを対象とする人権教育総合マニュアル』人権教育推進啓発センター（http://www.jinken.or.jp/archives/2521)から翻訳、刊行されています。英語版ほかは無償で公開されています。

防災教育

防災教育では、避難所の運営をめぐっての判断に苦慮するところから、クロスロードという事前の机上訓練が開発されました。危機対応においては、意見がわかれるのがつねで、正解を求めるのではなく、さまざまな判断ができるようになるためのものとして、注目してきました。

『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション クロスロードへの招待』ナカニシヤ(2005)http://www.nakanishiya.co.jp/book/b134280.html

『クロスロード・ネクスト 続：ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』ナカニシヤ(2009)http://www.nakanishiya.co.jp/book/b134658.html

『クロスロード 教育相談編』(2019) ナカニシヤ直販
http://www.nakanishiya.co.jp/book/b441106.html

国連でも、近年、いくつものビデオゲームが制作・公開されています。
https://unric.org/en/category/united-nations-digital-engagement-hub/united-nations-video-games/

こうしたゲームやビデオによるワークショップがどのようなものか、まだ、未知です。VR（バーチャルリアリティ）技術で、タブレットの AR アプリをつかって、ぬいぐるみとおしゃべりをするプログラムもあるようです。三宅なおみさんは、晩年、教室にロボットを持ちコンで、子どもたちのとのインタラクションを検証していました。また、モンスターハンターというオンラインゲームで、どのようにモンスターと見ず知らずの人と協働して、たたかうことができるのか、その効果を検証した博士論文もあるとのことでした。

シチズンシップや〇〇力といったものが測定できるのか、評価はどうかと問われます。〇〇ができるという Can do List の作成がなされたり、〇〇ができると〇〇だ、というルーブリックをつくることも流布していますが、参加型の学習の評価ができるのか、疑問がのこ

ります。当事者による自己評価や、ナラティブ研究やオーラル・ヒストリー研究の領域も意義あるものとされてきているようですし、主観をどう研究するかは、今後のことになるでしょうか。

協働・協同・協調学習

協働は、協同また協調という漢字があてられることもあります。東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構（CoREF https://ni-coref.or.jp/　2009 年度から 2016 年度 https://ni-coref.or.jp/legacy/ ）によって知識構成型ジグソー法をあらゆる教科で実践するこころみがなされた。ここでは協調学習とされています。今後は「一般社団法人教育環境デザイン研究所」となるようです。仮設実験授業に学んだとされ、「授業書」のような使い方キット（定番教材）https://ni-coref.or.jp/legacy/archives/5661 やハンドブック(https://ni-coref.or.jp/legacy/archives/14883) が公開されています。三宅なほみさんの業績はこちら (https://ni-coref.or.jp/nmiyake/) にあります。協働学習が学習成果につながることでは、対人関係学習（SEL：Social, and Emotional Learning）をより発展させた Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (CASEL) [https://casel.org/]が北米ではひろまっています。

オルタナティブ（もうひとつの）教育のありかた

大正時代には、児童中心主義による新教育がいくつも展開されました。戦後は、学校教育への批判から、欧州でのヴァルドルフ学校(日本シュタイナースクール学校協会 https://waldorf.jp/education/movement/) やサドベリー・スクール(http://democratic-school.net/)また、近年では、デンマークのフォルケホイスコーレを日本でも展開する動きがあります。不登校の児童・生徒対応ということからしいのですが、教育機会確保法が功を奏するか、見守りたいと思っています。セルビーによるグローバル教育やカナダのジョン・ミラー（『ホリスティック教育』春秋社）によるホリスティック教育にも、オルタナティブ教育への関心と重なるところがあります。

アートで思いを可視化する

考えや思いを皆のものにするために、これまでさまざまなこころみがなされてきました。笠尾敦司（東京工芸大学）さんの専門は、コミュニケーションアートだといいます。街並み絵巻プロジェクト (http://emaki.mailpaint.com/)、感性はがきプロジェクト（http://www.mangaface.com/ ）(http://www.japandesign.ne.jp/HTM/REPORT/kansei_hagaki/)、むすびめくんプロジェクト(http://musubime.mailpaint.com/takashimaya.html)はアナログで、人が集い、人とひとをむすぶアートのちからが発揮されています。ルサカワークショップ (http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/Africa_x_Japan_x_World_2011.html)は、アフリカの紛争地でどのような復興をめざすのかを、箱庭をつくって話しあいをすすめるものだといいます。いずれも、参加者が、わくわくしながら、参加するための手法としては秀逸です。

自分たちの現実を可視化する、技法としてグリーンマップ (https://greenmapjapan2010.jimdofree.com)というものがあります。日本での展開は、一時中断していましたが、村山史世（麻布大学）によって、SDGs との関連で再開されていま

す。

付箋に言葉を書き出して分類するようなことが一般に K-J 法だと、とられられているようですが、本来は、より複雑で、フィールドワークをへて、札に書いたことを、声にだしてよみあげたり、身体をとおしてなされるもののようです。

マインド・マップは、パソコンやタブレット、スマートフォーンのアプリケーションもあり、オンラインで共有もできるようになっていて、リモートでの参加の可能性もあるように思われます。宮田義郎さんはワールドミュージアム（http://wmuseum.weebly.com/260852641235486.html）というプロジェクトをかねてから手がけていて、ICT の普及により、進展が期待されるものです。

社会とのかかわり

国連は、2018 年から 5 月 16 日を「International Day of Living Together in Peace」平和に共存する国際デーとしました。共存「ともに暮らす」ためには、社会への参加が求められます。

独裁政治に抗するアラブの春に影響をあたえたジーン・シャープによる著書が、アインシュタイン財団のウエッブに所収されています。

Gene Sharp, The Methods of Nonviolent Action 1973

https://www.brandeis.edu/peace-conflict/pdfs/198-methods-non-violent-action.pdf

ジーン・シャープ『独裁体制から民主主義へ―権力に対抗するための教科書―』瀧口範子訳（ちくま学芸文庫、2015 年）

http://estudio-cuba.cocolog-nifty.com/blog/files/18.09%20ジーン・シャープ非暴力行動198の方法.pdf

https://sites.google.com/site/198methods/home

21 世紀になっても、まだ、戦火はやまないのは、きわめてざんねんですが、国際社会は着実に平和への歩みをつづけていることは忘れてはなりません。

米国の PBS がつくったドキュメンタリーA Force More Powerful では、20 世紀の市民による非暴力運動（デンマークやポーランド、チリ、インド、米国、南アフリカでの事例）をとりあげています。560 ページにおよぶ書籍もあります（https://www.nonviolent-conflict.org/icncfilms/）。

集団と個人との相克をのりこえる

歴史は、集団と個人のあいだで揺れている、のではないでしょう。明治期では富国強兵がかかげられ、滅私奉公というスローガンのもとに人びとは翻弄されてきました。また排他的な自給自足のコミューンがくりかえしあらわれたり、消えたりしてきました。ベティ・リアドンは、戦争に駆り立てるのは、家父長制であるとしています。

シチズンシップは、コミュニティでの生活を前提としますが、個人の尊厳と集団のアイデンティティティをどう両立させるかが課題となります、わたくしの幸福は他人の不幸ではなく、皆の幸せとなるように、幸せは、個々のものではなく、皆のものであることを願うものです。

さいごに

高校教師の実感としては、教科よりも、担任したクラスで、教科外でのことが、よい思い出となっています。若かったので生徒たちは、よくいろいろ頼みに来たものでした。そのような生徒と遊んでいたのが実際のところだったでしょうか。

今は、オンラインで授業がなされたり、授業評価がきびしくなされたり、ずいぶん変わってしましったようですが、仲間とともに、仲間から学ぶということは、変わらないと思います。JEARN の実践がさらなる展開をされるよう期待しております。